他人の言葉で「私」を語る
——太宰治「盲人独笑」のコラージュとその告白——

岡崎 倫子

一 「盲人独笑」と『葛原勾当日記』

太宰治「盲人独笑」は一九四〇年七月『新風』に発表された風変わりな作品である。本文はエピグラフと「はしかき」「葛原勾当日記。天保八酉年。」「あとかき」から成り、作品の大部分は実在の人物である箏曲家・葛原勾当の日記として提示される『葛原勾当日記』天保八年部分の抜粋が占めている。太宰は作品中に語り手「私」＝「（太宰）」として登場し、「ひどくもの珍しい」「その日記のほんの一部分を読んでいただけたら、それでよいのである」として読者に日記を紹介する。太宰の書いた文章として提示されるのは「はしかき」「あとかき」のみで、極めて少ない。

まず、実際に「盲人独笑」テクスト内に引用されている『葛原勾当日記』の概要を整理したい。この本を太宰治が手にしたのは一九四〇年五月のことだった。「はしかき」に書かれたとおり、友人であった劇作家の伊馬鵜平（伊馬春部として知られる）が彼にその存在を伝えたことがきっかけである。伊馬はそれを古本屋で発見し、「これを材料にして何か小説を書かないかと少し興奮の色を見せて」[1]当初は井伏鱒二の所へ駆け込んだ。しかし井伏は葛原勾当と同郷の出身であったこともあり辞退をした結果、その役目が太宰の所へ回ってきたのであった。五月二日、太宰は「お話の「盲人日記」おひまの折、こちらへ送つていただけないでせうか、ぜひ読んでみたいと思ひます」[2]という内容の手紙を伊馬へ宛てている。「盲人独笑」の発表は、そのわずか二ヶ月後である。

この『葛原勾当日記』は一九二五（大正四）年一一月二五日、非売品として世に出たものであった。発行者は葛原

勾当の孫である童謡作家の葛原菡（しげる）で、日記本文の他に葛原勾当の年譜、日記や筆記用具の写真、多くの著名人・専門家（佐々木信綱、三上参次、巌谷小波、東京盲学校校長・町田則文ら）による序文などが収録されている。葛原勾当については太宰が「人名辞典やら、「葛原勾当日記」の諸家の序やら跋やら、または編者の筆になるところの年譜、逸話集、写真説明の文など」から「少しづつ無断盗用」したと前置きをして「はしかき」に紹介文を示しているが、実際にそれらの資料の内容から逸脱した情報は見当たらず、ほぼ事実どおりとなっている。[3] しかし、葛原勾当の人生がこの「はしかき」どおりであるからこそ、なおさらこの日記の存在は驚異的なものであると言える。盲人が「一字一字、手探りにて押し印し、死に至るまで四十余年間つひに中止せず克明にしるし続けた」のだから。

三歳という年齢で両目を失明した葛原勾当が、それまでに識字能力を身につけていたとは考えにくい。九歳で箏曲の修行を始めて一五歳から近隣の町村で箏曲教授を始めた彼は、一六歳になる一八二五（文政一〇）年からの稽古日誌を弟子に代筆させていた。しかし二六歳の正月、彼は木製活字を用いて自らの手で日記をつけ始める。この木製活字とは、桃山時代に日本へ流入した文字印刷器具である。江戸時代における印刷技術の発達によって製版印刷が主流となり木製活字印刷は下火になるが、一七二二（享保七）年の出版条例発効以後、出版の許可を得た上で版木を専門の彫師に作らせ大量印刷をする製版印刷に対し、木製活字は許可も版木も要らない手軽さから藩版や私家版など小規模な出版物を作成する方法として人々の身近なものとなっていった。葛原勾当がこの器具を入手した経緯は明らかになっていないが、当時の出版物発行の中心を江戸や大坂と共に担っていた京都で修行を度々経験し、「八雲琴」の考案や折り紙や琉球時計の修繕などを行った好奇心の強さと手先の器用さと教養を持つ彼が、書かずに文字を記すことができる手軽な木製活字に興味を示したことには納得がいく。

彼が実際に使用した木製活字は、現在も広島県の重要文化財として日記や楽器と共に保管されている。これらは平仮名の「いろは」四七音に「ん」と変体仮名の「志」、漢数字の一から十、「正」「月」「日」「同」「奉」「御」「候」「申」、名前と雅号、そのほか濁点等の記号の計七八種がそろった

木製スタンプのようなものである。これらを真っ直ぐ印字できるように枠にはめて紙に押す。しかし葛原勾当は目でそれらの活字の識別をすることは出来ないため、それぞれの活字の側面には本数や位置の異なる溝が彫られていた。その本数を手で触って確かめ、活字を選んでいたのだろう。活字の精巧な作りに対しゴツゴツと歪な形をした溝は、木製活字を入手した葛原勾当もしくは彼の周囲の人物が後から彫りつけたものなのではないかと考えられている。視覚では活字を識別できず触覚のみで一つ一つを選び取るという、皮膚感覚へのすさまじい集中を要するこの作業を、彼は死の前年の七〇歳まで続けた。そこには時にユーモアをもにじませる内容とは裏腹な、困難を越えた「書く」ことへの激しい執着がうかがえる。[4]

この葛原勾当という人物とその書き続けた日記は、存在だけでもすでに衝撃的である。何が彼にそうさせたのか、という思いは「はしかき」から「葛原勾当日記。天保八酉年。」へと読み進める読者の胸に沸々と湧き上がるだろう。しかし冒頭でも示したとおり、この作品は奇妙な構成を持つ。作品は葛原勾当の生涯と日記を紹介するという意図を明確に「はしかき」にて示して始まったものの、その目的どおりに葛原勾当への興味と感銘が読者の中で頂点に達した時、太宰は今まで紹介してきた日記に自らの「細工」が施されていたことを突如告白するのである。本稿はその「細工」の手法とそれによって作り出された新たな日記の主旨を考察し、「細工」の中に見られる作品の創作性を追うことを目的とする。日記というメディアの性質も鑑みながら、他人の文章の引用によって自作をつくり上げていくことの意味を考えていきたい。

二　「盲人独笑」テクストと「細工」

「盲人独笑」内で「葛原勾当日記。天保八申年。」（以下「盲人独笑」日記部分とする）として提示される一年分の日記は、実は『葛原勾当日記』（以下『日記』とする）約四四年分の記述を一年間のものとして再構成したものである。その構成方法については、二つのテクストの具体的な異同を明らかにした山崎正純[5]・藤原耕作[6]両名の先行研究に詳しい。中でも藤原は「盲人独笑」日記部分を一〇箇所に区分

し、その引用元の詳細を明らかにしている。その論に従えば、実際の『日記』の天保八年の日記を下敷きにし、そこへ天保九・一〇・一一・一三年、弘化一～三年、嘉永三・五年、安政一・五年、明治一・五年の内容の引用を付け加える形で構成されていることになる。計算したところ、引用された回数が最も多いのは天保九年、続いて嘉永五年、天保一一年であり、これ以外の年はほとんど一、二度のみの登場であった。引用元が原典に確認できず太宰の加筆ではないかと推測されている部分も同様に数えたが、それに至ってはわずか二〇文程度であった。

引用方法の特徴について、山崎は以下のように指摘する。[7]

引用も、幾日分かをそっくり纏めて切り取ってきたものや、逆に異なる箇所から切り取ってきた断片を幾つも集めて、一日分の文章として纏めあげたものなどさまざまであるが、そうして寄せ集められた文章が極めて緊密な文脈のなかに収められていることに、作者の周到緻密な計算が働いているのをうかがい知ることができる。

「盲人独笑」日記部分において『日記』一日分の記録の中から抜き出されるのは一、二文であることが多く、それらの断片的に引用された素材は配列によって新たな文脈を形成し、ひとつの言葉がまったく異なる意味で使用されている箇所もしばしば見られる。例えば「盲人独笑」四月二〇日の「こよひわ、なぜこのやうに、ねられぬことかな。わけもない、ことばかり、おもひて、はや、うしのこくになるらん」は、藤原の指摘にもあるとおり、[8]引用元である『日記』天保八年一一月二二日ではその後に「こよひすこしねむったがわるいか」という文章が続く。それを削り、「あすわ、ふねなり」という太宰の加筆と思われる一文に繋ぎ、さらに『日記』天保一〇年七月二八日に書かれた不安な心持の和歌を続けて配置することによって、寝過ぎによる寝つきの悪さの記録が旅行への不安の記録に書き換えられているのである。

異なる年に書かれた文章をまとめ上げているこれらの手法が「盲人独笑」の前年に発表して高評価を得た「女生徒」（『文学界』、一九三九・四）のそれと極めて似通ったものであることは、高橋広満が指摘している。[9]「女生徒」は太宰の

愛読者であった女学生・有明淑の約三ヶ月分の日記から引用した文章を凝縮し、一日のうちに起こった出来事として再構成する形で成り立っていた。そして「盲人独笑」も、約四四年間を一年に再構成している。高橋はその「発想」の類似を指摘し、それらを「時間の極端な凝縮によって物語の力を拡大しようという野心」とする。そのほかにも「盲人独笑」と「女生徒」はその構成について多くの共通点を持つ。「女生徒」における日記引用部分は全体の「九割近く」[10]に上るとも言われているが、「盲人独笑」も加筆箇所が極めて少ないことはすでに述べたとおりである。さらに「女生徒」でも太宰は文章を一日の日記の中から一、二文のみという極めて短い形で抜き出し、異なる日付から抜き出した記録を順不同に繋ぎ合わせて引用元とは異なる意味を持つ文脈を形成させる方法を採っていた。例えば有明淑の奏でるあまり上手でないウクレレの音色を叔母がからかう「おや、雨かな？雨だれの音が聞こえるね」という言葉は、「女生徒」では母親の言葉となり彼女の母親への日頃の不満を述べる文脈の中へ挿入されることによって、母親が自分を子供扱いしている様子を表す言葉へと変化している。これは「こよひわ、なぜこのやうに、ねられぬことかな」で用いられていた方法と全く同じものである。原典の文章を細かな断片に分節して再構成することで新たな像を結ぶというこの手法は絵画のコラージュに通じるものであり、「盲人独笑」は前年の「女生徒」の執筆において体得したこのコラージュ的手法を再び存分に使用して書き上げた作品であると言える。

再構成された配列によって素材本来の意味を変えていくコラージュ的手法は、太宰による加筆部分がほとんど存在しないにも関わらず、「女生徒」と同様に原典にはない新たなエピソードを「盲人独笑」の中に生み出すことに成功している。それは先行研究が示すとおり、一一月一九日に「いではら九一ろう」に会う場面、そして「こまつやの、おかや」との「秘めたる交情」の二つである。しかし天保八年一一月二九日に「いではら九一ろう」に会ったことは事実、和歌も実際に葛原勾当の作で天保一三年一二月二日の『日記』に記されているものである。「しんがん（心眼）なるべし」と感嘆される言葉とそれに対する葛原勾当の「をかしなことぢや」という感想が付け加えられたことによって晴

眼者には理解できない盲人の感受性が印象づけられているが、その他のコラージュ部分から大きく外れた創作上のエピソードとまでは言えないだろう。すると太宰の全くの創作と言える部分は「おかや」の話だけであり、太宰が『日記』との間で最も大きく変化させた部分、つまり「盲人独笑」における太宰の創作性の核はそこにあるということになる。

前述のとおり、太宰は自らの施したこれらの「細工」を「あとかき」にて突如告白する。彼は「不逞の私の、虚構」を「ゆるして、いただきたい」「美しければこそ、手も、つけたくなつたのだ。ただならぬ共感を覚えたから、こそ、細工をほどこしてみたくなつたのだ」という不自然な箇所に読点が打たれたしどろもどろの言葉で弁明する。しかし、謝りながらもこれは「原本に於ては、必ずしも、事実で無い」が「私に於ては、ゆるがぬ真実」であり「四十余年間の日記の全生命を伝え得たつもり」だと言う。これらの「細工」はなぜ「全生命を伝え得」るといえるのか。これをもって太宰が伝えたかった「全生命」とは何なのか。

また、この告白の存在は同様の手法をもって構成されていた「女生徒」との差異を決定的なものにもしている。「盲人独笑」が「細工」の事実を本文中に明記しているのに対し、「女生徒」の引用元の日記の存在は太宰の夫人・津島美知子が太宰の死後に出版した『回想の太宰治』（一九七八・五、人文書院）に「S子さんの日記」として紹介されていたのみであり、初出当時は公表されず、膨大な引用の事実は『資料集第一輯　有明淑の日記』（二〇〇〇・二、青森県文学協会）が発行されるまで明らかにされなかった。つまり二つの作品は、「細工」の告白の有無において全く異なっているのである。この両者における違いは、単純に一方の日記の書き手がある程度の著名人で既に日記が出版されており、もう一方は全くの無名の人物であったために生じたものであろうか。無論それも関係しているのであろうが、それだけとは考えにくい。なぜなら「盲人独笑」において、「細工」があることは関係者に断っておく必要があっても、その一つが「こまつやの、おかや」の物語であることまでは指摘しておく必要がないからである。具体的な箇所は明かさないものの若干のフィクションが含まれている、という文章を添えるほうが、トリックを暴くという意味での読者の興

味は増したかもしれない。なぜ太宰は「あとがき」という作品の最後の部分においてこのような告白をしたのだろうか。

ここからは太宰の読んだ『日記』本文の考察からその「全生命」の本質を探り、それらを太宰の「細工」がどのように扱っているのか、その方法の必然性を追うことにしたい。

三　盲人がなぜ日記を書くか

「盲人独笑」日記部分と『日記』の内容は、両者とも葛原勾当のどちらかと言えば平凡な日常が中心となる。訪ねてくる弟子に稽古をつけ、時には遠方へ足を延ばして地方の弟子の出稽古をする。雨が降れば歯を痛み、暑くなれば不平を言い、寒くなれば風邪を引き、時には遊び過ぎてかえって「たいくつ」などと言う。劇的なエピソードの加筆が新たにいくらでも可能であったはずの「盲人独笑」でも大きな出来事といえば「おかや」のこと程度であり、記録しておかねばならないほど重要な事件等は見当たらないという点で二つのテクストは共通している。どの弟子に何の曲を指導したかという記録を除いては、記憶を目的とした文章が見当たらないのも特徴である。自分の書いた文章を読むことができない葛原勾当にとって日記が記憶のための記録でないことは当然であり、自らは日記の読者にはなり得ない。それにも関わらず日記を書く目的は何だったのかという疑問は、『日記』を前にした全ての人の胸に必ず浮かび上がるものであろう。

自分で読むことができないとすれば、この『日記』は第三者を読者として想定して書かれたのであろうか。一般的には個人的な記録として認識されている日記という媒体も、時に第三者の閲覧を想定して書かれることがある。特に作家の日記はその傾向が強く、自分の死後に出版されることを想定した筆者によって多くの切り取りや補記の挿入を施された永井荷風の『断腸亭日乗』[11]は最も有名なその例である。また、作品の素材とするために日記をつけていたと考えられる作家もあるようで、ボーヴォワールやモンゴメリは自伝小説のテクストに日記からの引用が多く確認されている。このように直接的・間接的問わず、いずれ公表することを想定して書かれた日記の多くは説明的内容に偏りが

ちであるという傾向を持つ。もちろんその目的は、書き手の生活と関わりを持たない読者が読んでも困らないようにするためである。

しかしこの『日記』は、読者に対して親切な読み物とは言い難い。例えば「盲人独笑」の七月一〇日には「そら。あしく。てりもせず、ふりもせず。そして、わしわ、すまぬことをしたわい。あやまり、あやまり」と言う記述がある。句読点等の修正はあるが、これは『日記』天保八年八月二八日から引用した文章である。「すまぬこと」の内容は引用の際に外されたのではなく、原典の『日記』にも書かれていない。葛原勾当が何をしたのかは元々説明がなされていないのである。このような記述は、『日記』の持つある種の性質を表している。もし第三者に『日記』を読ませる予定や、第三者から理解を得たいという目的があるのだとすれば、彼はもっと詳細な事情の説明を行わなければならない。しかし彼はここで記述を終えている。これは彼が第三者による『日記』の閲覧を想定していないこと、『日記』が第三者に情報を提供する媒体ではないことの表れであろう。もちろん多くの日記がそうであるように、葛原勾当も思うこと全てを『日記』に印字していたとは思えない。彼の場合は特に、自分には読めないが周囲には読める文字という手段を用いて記録をつけている以上、読まれてしまった場合を想定し、ある種の自己規制を行いながら書いていた可能性はあるだろう。「すまぬこと」の内実は、記さなかったのではなく記せなかったのかもしれない。それにしても、葛原勾当が読者の存在を意識していたならばもっと詳細な説明を施す必要があったのではないか、と思わせるような説明不足の箇所が『日記』全体に多く存在する。そしてこれらには補足説明として多くの注釈が編者によって加えられている。『日記』が彼にとって読み返して推敲することができないものであったとはいえ、『日記』の第三者に不親切な記述の多さはそれを彼が他人に読ませようとはしていなかったということを示している。そして「盲人独笑」として太宰に加工を施されたテクストにも、太宰はその作業が可能であったにも関わらず、それらの部分に補足的な文章を付け加えることはほとんどなかった。太宰は個人的な記録としての『日記』の性質、そのような『日記』を書いた葛原勾当の姿勢を尊重している。

では読者のいない文章を延々と書き続ける目的とは何なのか。それを考えるにあたって手がかりにしたいのは《盲人にとって「書く」とは何なのか》という問いである。一九四〇年代という盲学校教育の草分けの時代から三〇年以上にわたり県立山形盲学校に勤務していた鈴木栄助は、その著書『ある盲学校教諭の三十年』（一九七八・六、岩波書店）にて以下のように語る。

視覚刺激が断ち切られている盲児たちは、所在ないままに、眼に指をつっこんだり、貧乏ゆすりをしたり、視力の多少残っている子は眼前で手を振るなど盲児特有のしぐさに時間をもてあましている。これは意識の内面化現象とも考えられるし、心的機能からみれば退行現象とも見做されよう。さらに極端になると、あたかも起きているのか眠っているのかも分からない白昼夢を見ているかのような表情に出会うことがある。精神医学で傾眠といっている状態、すなわち強い刺激を与えられた時だけ精神反応があって、放置するとすぐ眠ってしまう意識水準を思わせる場合さえある。

中途失明の場合も、その形は異なっていても自己喪失という点では共通点がある。人生半ばにして失明するということは、視覚的に文化への道を閉ざされたことを意味する。この悲しい事態に自己の姿を見失い、無為無策の中に傷心を募らせる。傷心は焦心を呼んで、自己喪失は自己否定へとエスカレートすることがある。無意識と意識の差はあっても、自己の存在を見失っていることに変わりはない。

このような状態に陥った盲児に「人間存在の美しさ」に気づかせ「人間存在を肯定し、人間性を回復させる」のが盲児教育の基盤であると著者は続ける。その教育ステップは次のように構成される。第一段階「（1）外界に目覚めた人間への道」では、野山の散策など、無意識に避けていた外界にあえて身を置く。外界にふれることでその存在を認識し、逆に抵抗も受けることで自己の存在にも気づく。続いて第二段階「（2）社会的関連づけへの道」では日常の中で「さわる」（能動）と「さわられた」（受動）という活動を繰り返し、物体の客観性を知覚し社会構成を学んでいく。

そして第三段階「（3）対人関連づけへの道」で、盲児は初めて点字等の言語活動の機能に目を向ける。時間は要するが、その活動を通して児童は「言葉は人がお互いに意思を伝達しあう反応体系としての機能＝対人間との伝達機能」と「個人の思想や動作を助ける意思反応体としての機能＝個人内における伝達機能とを持っていることを理解する」。ここで盲児が「痛いほど」感じるのは「主体は自己だということ」であるという。

著者の言う「対人間との伝達機能」とは、言語の役割として一般的なものであるコミュニケーション機能を示すものだろう。彼らは点字を読むことを学び、触覚や音声等では物理的に届かない場所からの細かなメッセージを受け取る衝撃を体験する。さらに書くことを学び、声よりも細かさと永続性を帯びた機能的な方法で相手に考えを伝える能力を身につける。ではもう一方の「個人内における伝達機能」とは何か。これは、ある意思を持ち特定の行動を取りたいと思う自己を「反応体」として客観的に発見する機能のことなのではないか。自己の内部にあるものが言語という社会化された形式に変換される時、それらは主体側からも客観的に捉えなおすことのできる存在として自己から切り離されて自立する。つまり盲児は、言葉を通して改めて自らが伝えようとした内面を客観視し、さらには社会にその言葉を投げ出した「反応体」としての自己の客観的な姿をも認識することになるのである。文字を獲得することで「主体的に生きる社会的責任」を自覚したとき、盲児たちは「自己確立＝アイデンティティしたも同然」と著者は語る。

この第三段階で盲児たちが獲得していくものは、葛原勾当が日記を書き続ける理由と通じるものがあるのではないだろうか。文章を「書く」能力の取得と精神的な自立の関係は、たとえ読むことができなくても「書く」ことに熱中する葛原勾当の目的を示すように思える。日本語の点字がまだ誕生していない時代に生きた彼の印字は自分では読み返すことのできない不完全なものではあるが、彼はあの木製活字を手にした時、言葉を刻み込む主体としての自己を手にしたと言える。肉体的困難を伴いながらも記し続ける日々の作業は、彼にとっては刻印者としての自己の主体性を毎日確認する作業だったのではないだろうか。その記録

が絶対に書き残さなくてはならないものとは思えないような平凡な内容であることが、「書く」ことそのものが彼の目的であったことを浮き彫りにしている。この記録の積み重ねこそが彼の生きた証であり、その彼の姿こそが日記の「全生命」なのである。太宰が「盲人独笑」日記部分を葛原勾当の極めて個人的な記録であるという性質から逸脱させなかったことが、「四十余年」の葛原勾当の姿勢をそのまま「盲人独笑」に生かしている。その単調な文章の背後で自身を見つめる葛原勾当の切実な視線を、読者は感じ取らずにはいられないのである。

四　恋の記述と「真実」

しかし、『日記』の個人的でなおかつ葛原勾当の険しい自意識の見え隠れする性質をそのままにしたものの、太宰は一つの恋を捏造している。「四十余年間の全生命を伝え」るための加工になぜ恋の捏造という「虚構」が入ったのか。そしてそれはなぜ恋でなくてはならなかったのだろうか。

「盲人独笑」日記部分の「おかや」との交情が太宰の創作であることはすでに述べたとおりであるが、葛原勾当の恋の記録そのものが『日記』中に全く存在しないというわけではない。実は天保八年から一〇年頃までの『日記』には、「あるひと」という人物に関する記述やその人物に宛てる恋歌がしばしば見られる。「あるひと」が何者であるのかは記されておらず、その人物が「おかや」であるか否かについては断定不能であるが、太宰がここに「おかや」の物語の着想を得た可能性はあるだろう。この「あるひと」に関する記述を見る限り、二人の関係が始まったのは天保八年以前であると推測できる。ここで問題なのは、この天保八年の時点で葛原勾当はすでに結婚していたという事実である。天保七年、彼は近隣に住む庄屋田中彦左衛門（母親の実父の長男）の娘アサと結婚し、以後二男一女をもうけている。だが妻の名は『日記』全体を通して一度も登場しない。一夫一婦制が確立している時代でないとはいえ、盲人の彼が結婚した背景に彼の生家の血縁関係が影響していることはアサの出身家からも明確であり、記録からうかがえる葛原勾当と「あるひと」の間にある様子が〈秘めた恋〉そのものであることには納得がいく。しかし本稿でこの恋

を取り上げるのは二人の間柄を糾弾することが目的なのではない。この恋は、『日記』が弟子による代筆であった天保八年以前と葛原勾当の手による記録となった天保八年以降をまたぐ存在である。代筆期と自筆期の二種類の日記における記述の対比は、日記に恋を記すことの意味を明確にしている。

天保七年　丙申正月より
　琴・三味線稽古覚
正月六日。井原行。
同十四日。八尋戻ル。
同十五日。服部永谷行。さらへ。
同廿二日。百谷、一ノ井出行。稽古。友千鳥。
同廿七日。八尋帰宅。
二月二日。大江、田郷へ行。琴、夕顔。〆。同、鳥追。〆。三味線、袖の露。琴、あヤキぬ。稲木、倉垣内稽古。六段。

以上は天保七年、代筆期の『日記』である。[12] 外出先や稽古内容のみが記されているのがわかる。代筆期の記録には全体を通して歌は挿入されず、葛原勾当の雑感も記されていない。すでに始まっていたと考えられる「あるひと」との関係も当然ながら登場しない。他人を媒介とする代筆は楽であるが、他人の視線を想定した上で記す内容は制限を免れない。一方で困難を伴いながらも木製活字を用いることで、葛原勾当は他人の視線を避けて内容上の制限を取り払うことを可能にした。この恋の記述の登場には、自力での印字によって葛原勾当が自己解放の場を獲得したことが最も端的に表われていると言えるだろう。「盲人独笑」ではさらにその恋を朧なものから「おかや」という対象やその交情の経緯が決定された明確なものに加工することで、その存在を強調している。

太宰は「おかや」との関係を「「葛原勾当日記」原本に於ては、必ずしも、事実で無い」としながらも、「私に於ては、ゆるがぬ真実」とする。確かに弟子と師匠の恋を捏造であり、「事実」ではない。しかし、恋という秘め事を日記に綴ることのできる自立した盲人の姿はまぎれもない「真実」でなのである。〈秘めた恋〉に焦点化することには、盲人が

「書く」力を得て自立し、変化したことを明確にする効果があった。

「盲人独笑」の葛原勾当は「おかや」との関係性が不吉な方向に傾いたことを思わせる「おかや、ひとり寝。さみせんにて」という記述の翌日、このように記す。「けいこ、あいすみ。つらきめに、あいたることか。ふつふつ、つかれた。四そく（足）かなわず。いわれず。きこゑず。ただ、ただ、見ゆるばかりで。ふふ」（傍線は引用者。太宰による加筆部分を示す）。ほとんどが『日記』からの引用で成り立っているが、「ふつふつ、つかれた」と、印象的な笑い声「ふふ」だけは『日記』に見当たらない。何もかもが思うようにならない辛い状況に疲れ切った人の唇から漏れる低い笑い声は、何か異様なものを感じさせる。苦しみの中で涙ではなく笑いが漏れる時、それは悶える自分への自虐の状態だろう。題名とも関連していると考えられるこの「独笑」は、〈秘めた恋〉を誰にも言えない自分自身を嘲笑う声のように響く。〈秘めた恋〉に苦しむ自己を「書く」力の獲得は、誰にも侵されない自立した立場で恋の苦しみを密かに吐き出し、そんな惨めな姿の客観視し自虐し「独笑」する空間の獲得であった。この「独笑」する声こそが、「書く」力によってアイデンティファイした葛原勾当の姿そのものなのである。

以上をふまえた時、改めて太宰がその「虚構」を隠すことなく示した理由も自ずからわかるようでもある。「細工」を施した箇所を太宰が明らかにしたのはそれが露見した時の言い訳だけではなく、そもそも「虚構」であるか否かは太宰にとって問題でなかったからではないか。「虚構」の内実ではなく「虚構」によって照らし出された葛原勾当の姿こそが『日記』の本質であり、それこそが太宰が「細工」によって伝えた「全生命」なのである。

五　他人の言葉で自己を語る

「盲人独笑」日記部分は、原典の『日記』の性質をそのままに残して各要素を強調する形で再構成された。しかしこの精密なコラージュによって作り上げられた葛原勾当の像に、最後に太宰はひとつの名前をつける。「そこに記されてある日々の思ひは、他ならぬ私の姿だ」。自らはほとんど

加筆せず、他人の言葉の再構成のみで作り上げた像を、太宰は「私の姿」と呼んでしまっている。他人の書いた文章を大量に引用した罪を隠蔽して正当化する言葉とも受け取れるが、その真意は何だろうか。

まず、その頃の太宰自身はどのような生活を送っていたか。「盲人独笑」発表の前々年、彼は前述の津島（旧姓石原）美知子と結婚している。それ以前は自殺未遂や芥川賞事件、パビナール中毒、精神病院への入院、離婚など、私生活のスキャンダラスな側面が文壇での彼の評価を貶めていた分、結婚以後の健康的な生活は精力的な活動を開始する大きなきっかけとなったようである。彼はそこからすさまじい数の作品の執筆し、一九四〇年だけでも「盲人独笑」を含む一八作品を発表した。随筆等を含めた原稿の執筆依頼が急激に増えたのもこの頃で、美知子夫人は「予定表を作って調整をしなければならぬほど」[13]の注文が来たのは一九三九年の一一、一二月頃が初めてであったと回想している。

しかし猛烈な執筆活動の背後にあるのが心身の充実だけではないと考える説も当然ながら多い。太宰は結婚の媒酌人であった井伏鱒二に「私もきつといい作家になります。お名をはずかしめないやう、高く精進いたします。（中略）仕事します。／遊びませぬ／うんと永生きして、世の人たちからも、立派な男と言はれるやう、忍んで忍んで努力いたします。／（中略）もう十年、くるしさ、制御し、少しでも明るい世の中をつくることに、努力するつもりでございます」（一九三九・一・一〇）[14]という手紙を宛てている。彼にとって、この結婚は小説家としての師である井伏という恩人に仲立ちされた、社会的信頼を失わないための最後の手段でもあった。安定した生活を送り作品を確実に書いていくことを今始めなければ、作家としての社会的自立は不可能であった。当時の太宰にとっても「書く」力は自立の力だったのである。彼の中にも葛原勾当と同様に、当時の作品の特徴として指摘される「明るさ」「かるみ」とは裏腹な苦しみ、それを超える「書く」ことへのすさまじい執着があったと言えるだろう。「書く」力だけが両者を社会の中にようやく位置づけていた。そして二人の中には困難を越えて執着するだけの喜びがあったのだろう。これらを踏まえた時、初めて葛原勾当と太宰の記す言葉は重なり、盲人に共鳴した「そこに記されてある日々の思ひは、他なら

ぬ私の姿だ」という言葉の真意が理解されるようでもある。

ちなみに「盲人独笑」発表の翌年、太宰は「文盲自嘲」（『琴』、一九四二・一〇）という随筆を発表している。これは「盲人独笑」を読んだ葛原菡から「えちごじし。九十へん」の部分を「それは聞きあえませぬ太宰くん」と指摘する手紙をもらって自らの無知を恥じ、創作集に編入する際には「四きのながめ。琴にて。三十二へん」に訂正することにしたという内容である。ここで言う「文盲」とは太宰のことを指すのだろう。「盲人独笑」と「文盲自嘲」、この二つのタイトルは単なる言葉遊びではなく、手探りで活字を探す盲人・葛原勾当の独笑と、文学に対して依然手探りである太宰の自嘲の対比ということであろうか。太宰はここでも執筆に苦闘する自分を葛原勾当に重ね合わせている。

さらにこの「盲人独笑」の構成は、コラージュによって浮き彫りにした盲人の姿を最終的に全て「私」つまり太宰自身のものとして回収してしまう効果を持っている。当初は非売品として発行されたこの『日記』のように読者が簡単に手にすることのできない文章を原典としたコラージュは、引用部分と加筆部分との境界の区別が不可能である。そこに「細工」の事実の告白のみが加えられた場合、原典の存在そのものが疑わしくなり、逆に全てが引用者の創作にすら思えてくるのではないだろうか。『日記』とその書き手の存在が評伝とともに史実として最初に提示され、実際の日記が作品の大半の紙面を割いて提示されるものの、最後で行われる告白によって今までの記述の信憑性が全て奪い取られる。むしろ葛原勾当の評伝が詳細であったことが、なおさら精巧な罠であったように思わせるのである。この告白を読んだ途端、読者はそれまでの文章全てが太宰によるフィクションだったのではないかと感じるだろう。丁寧な細工によって提示された葛原勾当、その「書く」ことでアイデンティファイする姿は、最終的に葛原勾当のものではなく太宰の「私」語りに回収され、結果として太宰が自身の言葉をほとんど用いずに太宰自身を映し出していくものとなるのである。「虚構」が露見した時のための言い訳や「虚構」を超えた真実の存在としてだけではない、「告白」が最後に行われた理由がここにもある。紹介や盗作に留まらず原典の執筆者のオリジナリティーを凌駕していくコラージュ芸術の創作性が、この作品の奇妙な構成に現れてい

るといえるだろう。

［注］

1　井伏鱒二「余談」（『太宰治全集　第五巻　月報5』、一九五六・二、筑摩書房）

2　『太宰治全集』第一一巻（一九七七・六、筑摩書房）

3　水川布美子「太宰治「盲人独笑」試論」（『神戸大国文』、二〇〇四・三）に詳しい。

4　小倉豊文校訂『葛原勾当日記』（一八九〇・五、緑地社）の写真資料および付録「木活字とその使用法」に詳しい。

5　山崎正純「「盲人独笑」単一表現の試み」（『太宰治』、一九八五・七）

6　藤原耕作「太宰治「盲人独笑」論」（『太宰治研究』、一九九九・六）

7　同注5

8　同注6

9　高橋広満「太宰治と井伏鱒二――「葛原勾当日記」をめぐる」（『国文学　解釈と鑑賞』、二〇〇一・四）

10　相馬正一「太宰治「女生徒」成立の背景――有明日記との相関をめぐって――」（『太宰治研究』、二〇〇〇・二）

11　永井荷風『断腸亭日乗』第一巻～第七巻（一九八〇・九～八一・三、岩波書店）

12　小倉豊文校訂『葛原勾当日記』（一八九〇・五、緑地社）

13　津島美知子『増補改訂版　回想の太宰治』（一九九七・五、人文書院）

14　同注2

本稿における「盲人独笑」の引用は全て『太宰治全集』第三巻（一九七五・九、筑摩書房）に拠った。なお、旧字体は適宜新字体に改めた。